、暮らし、地域をつなぐ［ターンズ］ | Vol.18 | 2016 | 8月号 |

TURNS

TURNSな人々

パーマカルチャーデザイナー

四井真治

若者よ、地方をめざせ!

内田樹

土のある暮らし

心みたされる日々を手に入れよう

Life on earth !
Friendly soil !

〈山梨県甲州市〉つちころび
野草を摘み、生活に生かす
日本人の知恵をつないでいく

〈長野県安曇野市〉舎燈夢ヒュッテ
農的暮らしの伝道師が開く
新生・パーマカルチャー道場

〈北海道帯広市〉いただきますカンパニー
農場のそのままを体験する
「農場ピクニック」

地方で働く人の登竜門 第9回

地域おこし協力隊のリアルライフ

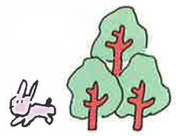
地方への移住とローカルワークのきっかけをくれる「地域おこし協力隊」。
今回は、北海道有珠郡壮瞥町と群馬県利根郡片品村で活躍する、
協力隊にお話をうかがいました！

文：市村岳代（P.84-85）、鍛冶恵利（P.86～87）　写真：服部琢磨（P.84～85）、鍛冶恵利（P.87）

コジマさんおすすめの壮瞥公園にて。梅が満開になる4月の下旬には毎年多くの人が訪れる。正面には洞爺湖と中島、そしてお天気がいい日は「蝦夷富士」の異名を持つ羊蹄山の姿（写真奥）も見える最高のロケーション。

case 1 北海道有珠郡壮瞥町 地域おこし協力隊

多すぎる魅力を整理して町を知らない人に伝えたい



「ワイルドな自然の中に町があること、もぎたての果物が手に入ること、洞爺湖があること、ルスツなどのリゾート地に近いこと。ポテンシャルがありすぎるんです！」

北海道有珠郡壮瞥町の魅力をそう語るのは、ドイツ出身の岡ドルゲ・コジマさん。２００４年の京都への留学を皮切りにヨーロッパ、北海道と東京などを行き来していたが昨年9月から壮瞥町の商工観光課に所属。全国でも数少ない外国籍の地域おこし協力隊として活動している。活動の柱は、町の「多すぎる魅力」を整理し伝えること。赴任後、まず参加したのは町のサイトのリニューアルプロジェクトだ。今春オープンした新サイトではブログも担当。「人を通じて町を紹介したい」と、積極的に多彩な人々と会う日々を過ごす。今後サイトはよりコンテンツを充実させる予定だが、一方で情報の届け方も考えるべきだと話す。

「残念ながら町の名前を知っている人は多くはないと思います。なので、〝北海道〟〝大自然〟〝いなか町〟などの検索キーワードから町のサイトにたどりつけるようにする必要がありますね」

マーケティングの重要性を説くコジマさんは、町に来る前札幌市の企業クリプトン・フューチャー・メディアで、一般人が自由に創作した楽曲やイラストで形成されるバーチャルシンガー「初音ミク」の海外ＰＲを担当していた。独特な「現象」であることに加え、コジマさんが切り口に選んだのは「ソーシャルなもの」という点だ。欧米ではネットが若者の人間関係を希薄にしたと問題視されていたが、「初音ミク」は一般クリエイターのネット上の交流により進化し続けていることを強調。最先端のものとして評価されることに。「少しだけファーカスを変えたら物事が動き出した」と振り返る。

海外へのＰＲ参謀からローカルの魅力発掘へ

夫の出身地でもある壮瞥町の地域おこし協力隊について知ったのは、仕事に手ごたえとやりがいを感じていた、まさにそのころ。

「会社を辞めるつもりなんて全然なかったんです。でもローカルの仕事にもすごく興味はあって。そのことを知っていた夫が教えてくれたんです。職場の社長も北海道を盛り上げたい！　という気持ちの強い人で、ローカルでの活動を応援してくれました」

同社とはいまもつながりがあり、2月の昭和新山国際雪合戦では「雪ミク」が登場し華を添えた。

新しいやりがいを求め、壮瞥町へやってきたコジマさん。しかし、当初は「理想の仕事ができる！」と、協力隊の仕事のいい面ばかりを見ているのではないか、という不安もあった。実際に仕事を始めてみるとマーケティングの重要性を理解してもらえず、衝突もあったという。

「でもすごく情熱をもって説明したら、理解してもらえて。ここでがんばりたい！　と思いました」

任期は残り2年ほど。今後は町のロゴやキャッチを町民と考えるブランドワークショップを開催。移住を促進するプロモーション映像の作成と写真アーカイブの整理にも取りかかる予定だ。

町民からは「まっさらの状態で町を見てくれるのがいい」との声も。ポテンシャルが高いこの壮瞥町のどこに焦点を当てるか。「少しだけフォーカスを変える」役割を担い、新しい角度から町の魅力を発掘していくコジマさんに期待が集まる。

（右）ブログ掲載のため壮瞥町天文同好会の代表、田中文夫さんに取材。町は環境省の平成18年度夏期「全国星空継続観察」で全国３位、道内１位の星の明るさと認定された。（左）昭和新山国際雪合戦のキャラクター「ブラッキー」と北海道を応援するキャラクター雪ミク（初音ミク）。

（左）天体観測ドームがありアニメ「天体のメソッド」の舞台になった「森と木の里センター」。（上）「コジマさんみたいな人が町に新鮮な空気を入れてくれる」と田中さん。

北海道有珠郡壮瞥町の地域おこし協力隊への 6 Questions！

岡ドルゲ・コジマさん

ドイツ生まれです。コスモス（宇宙）が語源の「コジマ」がファーストネーム。

Q どうして日本へ？

バイオリン奏者の父から聞く演奏先の話のうち、とくに興味を持ったのが日本でした。大学で日本語や日本文化を勉強し、卒業後はいったんドイツで就職。でもどうしても日本で働きたくて。ビザ取得に必要な資格を得るためイギリスの大学院で修士号を取得し、2008年、日本で働きはじめました。マーケティングやウェブ制作、ＩＴ関連の仕事をしてきました。

Q 壮瞥町のいいところは？

ワイルドな自然の中に小さな町があるところ。自然が好きで移住したいけれど、田舎すぎると不安という人にはちょうどいいと思います。果物が大好きなのでもぎたてが安く手に入るのはうれしいですね。

Q オフは何をしていますか？

最近ボロボロの家を買ったので（笑）、おもにそこの片づけをしています。洞爺湖の眺めが最高なんです。あと、登山が好きなので、オロフレ山を登ったり羊蹄山や樽前山（写真）まで足を延ばすこともあります。

Q 毎日の生活の充実度は？

アートシーンや文化的なものに触れる機会は減りましたが、自宅に戻って夫とランチができるような毎日に満足しています。

Q 何時間働いていますか？

週30時間働いています。月～木曜日まで一日7.5時間働いています。

Q それにしても日本語がじょうずですね。

独語と日本語のほか英語と仏語も話せます。じつは北海道の新キャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」の英訳「Hokkaido, Expanding Horizons.」も担当させてもらい、高橋はるみ知事にもお会いしました（写真右は佐藤秀敏壮瞥町長）。

写真提供：壮瞥町役場

case 2

群馬県利根郡片品村

地域おこし協力隊

尾瀬をはじめ、豊富な観光資源をどう生かす？地元発ブランドを掘り起こせ

群馬県の北東に位置し、尾瀬国立公園の群馬県側の玄関口でもある片品村。新潟、福島、栃木の三県に面し、関東地方でもとくに雪の多い地域として知られる。

本間優美さんは、東京生まれの東京育ち。大手通信会社で営業職を9年務めたのち、脱サラして片品村の地域おこし協力隊員になった。じつは2年前に片品村を初めて訪れたとき、まだこの地に地域おこし協力隊は存在しなかった。

「前職で地方への出張が多く、たくさんの田舎を見てきました。地域おこしがまだ活発でなくて、人手が必要な場所で仕事をしようと思っていたんです」

もともと別の団体の仕事をするために片品村へ移住した本間さん。その後すぐにこの地に地域おこし協力隊が設置されることが決まり、役場の人たちに誘われて着任した。そのため他地域の協力隊を研究し、必要なものをそろえ、人材を募集し……と、いまの協力隊をつくりあげてきた。

本間さんの現在の仕事は情報発信がメイン。町が主催するイベントをSNSなどで発信するほか、役場の若手職員や片品村出身の切り絵作家と協力し、片品村で生産・加工された商品を「尾瀬ブランド」としてまとめたパンフレットを制作する隊員の丸山さんなどとともに、地域の観光や商品のPR活動に奔走している。

また、このまま人口減少が続けば約50年後には人がいなくなってしまうとされる片品村。町のゆくすえを思ってか、最近では一度都会に出ても、帰ってくる若者が増えている。本間さんはさらに移住者を増やすために移住情報サイトを新設し、情報共有にも努めている。

「東京から沼田ICまでは1時間半。そこから片品村までは30分と、近年は新しい道路が開通して都心からのアクセスもいい。尾瀬や大自然が広がる環境のよさもあって、それほどPRしなくても人が来てくれる場所だったんですね。でも、情報が整理されていない部分があって、もったいないと感じる面も。これまで表に出てこなかった町の魅力をもっと発信していきたいですね」

命をいただき自然と寄り添う暮らし

片品村の協力隊は現在6人。体験型旅行の創出に取り組む岸畑さん、地域の子どもたちを自然のなかで遊ばせる「森のようちえん」やハーブガーデンなどに取り組んでいる中村さんなど、それぞれの隊員が得意な分野を生かして活躍している。

地域おこし協力隊の活動のかたわら、本間さんは、片品村の猟友会員として狩猟にも挑戦している。数十年前、この地の大型哺乳類はツキノワグマとカモシカのみだったが、近年はシカやイノシシが増加。生態系や自然、農作物を守るため、頭数管理をしなければならなくなっている。

本間さんは、大学在学中にインドやタイ、カンボジアなどの開発途上国をバックパッカーとして旅した。旅先では動物や魚などが店先にそのままの姿で売られており、命あるものをいただくことによって、生きているのだと実感した。

片品村でも地元で収穫した野菜を食べ、山に入り猟をして、シカやイノシシなどの肉を食べる。だからこそ、どんな命も無駄にはしたくないと考えている。

シカを害獣とすることについては賛否両論あるが、駆除活動は現実に行われている。

そこで駆除・廃棄されてしまうシカを資源として少しでも生かしたいと、本間さんは鹿革製品の販売にも挑戦中だ。試作を繰り返し、完成したばかりの鹿革製品は、尾瀬の山小屋一か所と村内の温泉施設で販売することが決まった。

地域おこし協力隊は3年を期限としているが、本間さんは協力隊の業務が終わっても片品村に住みつづけたいという。

「協力隊の仕事にかかわって、地元の皆さんたちとも交流が活発になってきたと感じています。そのなかで、仕事がないから若者が帰ってこられないという意見もよく耳にします。

今後は若い世代のためにも、自分のためにも、仕事づくりに力を入れていきたいですね」

（上）なめして染めた革にレーザー加工でイラストをほどこし、手作業で金具をつけた。（左）「尾瀬ブランド」のパンフレット。村自慢の豆腐やソーセージなどを掲載。

（右）写真左から順に本間さん、内野さん、丸山さん、中村さん、岸畑さん、斉藤さん。本文中の活動以外に、内野さんは移住前のネットワークを使い、地元の農作物や加工品をPRするなどしている。今年度からは、より村民に身近な町内施設でも働き、協力隊のあり方を模索する。

（下右）関東から尾瀬への入山口は鳩待峠、富士見下、大清水。いずれも片品村にある。尾瀬は希少な湿原植物の宝庫で、6月にはミズバショウ、7月にはニッコウキスゲなどが咲く。（下左）冬期の狩猟で、山に入り銃に弾込めをする本間さん。ゆくゆくは鹿革製品のラインナップや、販売箇所を増やしたいと考えている。

群馬県片品村の地域おこし協力隊への

5 Questions！

本間優美さん

子どもの頃から田舎に憧れが。長期休みには東京の両親が遊びに来ます！

Q 片品村の魅力を教えて！

東京から2時間程度と、都心からのアクセスがいいのに、尾瀬をはじめとする雄大な自然が残っているところ。さらさらのパウダースノーが降る冬も大好き。カンジキを履いて山に出かけることも。雪国でしかつくれない「雪下にんじん」はびっくりするほど甘いんです。

Q おすすめスポットは？

景色がキレイな場所なら、秋の菅沼（写真）や四季折々にさまざまな表情をみせる尾瀬も好き。湖や紅葉が素敵なんです。食べ物なら、とうもろこし街道！　農産物の直売所が多くある街道で、夏には焼きとうもろこしを販売しています。

Q うれしかったことは？

村には若手が少なかったけれど、私たちが来てから、同じ世代の人たちがつながりはじめたこと！　村内だけでなく利根・沼田エリアで仕事をする人たちとも交流があり、BBQなどのイベントをすることも。

Q 猟のことを教えて！

駆除期間はおもに夏季ですが、狩猟期間は冬なので、雪山に入って猟友会のおじさまたちと狩猟をします。猟師小屋で鍋などをいただくことも。シカの駆除活動に参加するため、研修も受けました。

Q 今後の目標は？

鹿革製品を加工、販売する「尾瀬鹿プロジェクト」を軌道にのせることです。あとは、協力隊の期間が終わったあとに働くことができる場所や、IターンUターンを促進できる仕組みづくりをしたいと思っています。